

[講演録] 映画『あつい壁』上映会 中山節夫監督講演会

【開催日】2018年11月3日

【会場】国立ハンセン病資料館 映像ホール

司会：本日はちょうどお隣の多磨全生園の方で、秋の文化祭が開催されておりました。皆さんの中にも、行かれた方もいらっしゃったかと思います。ここハンセン病資料館は1993（平成5）年に開館しましたが、お隣の多磨全生園は来年でちょうど開所して110年なんですね。多くの皆様がこれまで多磨全生園を訪れていただいたかと思います。

本日ご覧いただく映画『あつい壁』は、今からあまり想像も出来ないような出来事を描いたものではあるんですけども、それも今からまだ数十年前の話なんですね。改めて、今現在の社会における偏見・差別について考えるきっかけになればと思いまして、こうした上映会を企画いたしました。本日はありがたいことに、この『あつい壁』を作られました監督である、中山節夫監督もお招き致しております。

簡単に私の方から、まず中山監督についてのご紹介をさせていただければと思います。中山監督は1937（昭和12）年生まれの方なんですけども、ご出身は熊本県なんですね。熊本にも、菊池恵楓園という国立のハンセン病療養所が1箇所ございます。皆様の中には、ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。2階の常設展示室にも菊池恵楓園のご紹介のビデオなどもございますので、またこちらもあわせてご覧いただければと思います。

中山監督は1960（昭和35）年に多摩美術大学付属芸術学園映画科をご卒業されて、日活の撮影所に入所されました。その後、1962年からフリーの助監督として、多数の作品に携わられました。その後、熊本に1度帰られるんですけども、劇映画のデビューは1969（昭和44）年であります、本日皆様にご鑑賞いただくこの『あつい壁』はそのデビュー作になるんですね。この作品を通してぜひ当時のハンセン病患者、それから回復者に向

中山 節夫

られた差別的な視線についても考えていただければと思います。

映画上映会については2時半から開催したいと思いますけれども、その前に中山監督から映画に込められた思いなどぜひ伺っていきたいと思います。

それでは、中山監督をお呼びしますので、皆様大きな拍手でお迎えいただければと思います。よろしくお願ひします。

中山監督：今日はありがとうございます。これ50年前なんですね、作ったのが。ちょうど私が今ご紹介いただきましたけれども、もともとはお医者さんになるつもりが、勉強しないで映画ばっかり観ててこういう結果になって、当時は映画学科の大学っていうのは日大しかなかったんですね。そしたら誰かが探してくれて、多摩美の中にもあるということを教えてくれたんですね。そして、多摩美の中の映画学校に行って、運よく映画科に入れたんですね。

日活には、映画学校の卒業1年前に入ったんですよ。あんまり学校が向かなかったので。だから、受けたら入れたもんですから、日活に入ったんです。当時は、石原裕次郎さんが長い脚で撮影所を闊歩していたり、ギターをひきながら小林旭さんが出演していたりと、そんな映画ばかりだったので、農村出身の自分には都会向きの映画は合わないと思って、日活をやめることにしました。

その後は、記録映画をやったり、教育映画の助監督、まあ児童劇なんかやってるうちに熊本へ帰りまして、今から観ていただく『あつい壁』を、運動を起こして作ったんですね。

この映画の背景についてですが、熊本のちょっと市内の北側に、立田山っていう山があるんですね。その麓に、ハンナ・リデルさんという英国の宣教師が明治時代にやってきました。聖公会の方

です。

それで、熊本に本妙寺という、加藤清正のお母さんを最初祀ったところなんんですけど、日蓮宗のお寺があります。リデルさんが本妙寺に桜を見に行つたんですが、本妙寺にはすごい階段がございまして、そこでリデルさんの目に飛び込んできたのは、その両側の参道で物乞いをするハンセン病の人たちだったんですね。リデルさんは、それにショックを受けました。そして、イギリスに帰つて金を集めて、また熊本へ来て、日本で2番目に古い、私立の回春病院というハンセン病の病院を作ったんですね。1895（明治28）年のことです。

その後、姪御さんのエダ・ライトさんって方が後を継がれたんですけど、回春病院は1941（昭和16）年に閉鎖になります。その時、回春病院の患者さんたちは菊池恵楓園にうつったんですね。それで回春病院は空くことになったんです。その跡地に、恵楓園入所者の子どもたちが生活する「竜田寮」が作られたということになります。この竜田寮こそが、『あつい壁』で描いた黒髪校事件の舞台の一つとなります。

私がハンセン病というものを意識したのは、小学校1年生のことでした。恵楓園の隣に今は農業公園となっていますが、前は種畜牧場があったんですね。小学校の1年から中学校の3年まで春の遠足がそこだったんです。私の小学校は恵楓園まで約3キロありました。昭和でいえば昭和19年の話ですね。

そこは種畜場ですから、家畜の増産のため、ヒツジとヤギと豚ぐらいしかいなかつたんですね。豚の見える所が一番恵楓園に近い。で豚のいる所を、先生に連れられて見に行きました。6歳の、幼年ですね。燕麦の畑があって、向こうに異様な塀があったんですね。その塀は当時、非常に高く感じたんです、私はこんな小さいから。「先生あそこ何ですか？」って聞いたんですよ。そしたら熊本弁でね、非常に悪い言葉で「きゃあくされ」って言ったんです。腐れちゃった人っていう意味なんです。「きゃあくされ」がいるところと先生からも聞いた気がします。

私は、ハンセン病がどういう症状かも知らない。

その恵楓園って所は、どういう所かも知らないけれども、幼年の私がですよ、6歳の私が今でも背筋がゾーっと、こうなんか寒くなってるのを覚えているんですよ。差別っていうのはね、誰が教えるともなく、ご飯を食べるよう日々的に教えられるんじゃないかな、ご飯を食べるようにな。それが既に6歳の子どもにね、本能的に染みついてしまってるんじゃなかろうかなあと思ったんですね。それが最初の、私とハンセン病との出会いでした。

私が存じ上げている入所者の方からは、患者さんが亡くなられてもですね、肉親は遺骨も引き取らなかったと聞きました。今、恵楓園の自治会長をやっている志村康さんから、「遺骨も引き取らんとだよねえ」という事を、私は直接聞きました。患者さんの故郷では、その家から患者が出たことをみんな知ってるから良さそうなもんだと思うけど、やはり残された家族は、またそこで差別が再燃するっていう事が辛いんじゃないかと思います。

さて、昭和25、26年頃にはプロミンが出てきて、ハンセン病は治るという事は、私が中学に入った頃にはもう既に聞いとったんです。1人誰か恵楓園から退院したらしい、退所したらしい、ということを聞いておりました。その方は園内の小学校の先生をやっていた人で、写真を見せてもらうとどこもどうもない。恵楓園内の学校は私の村の分校でしたので、先生たちも行ったり来たりしていました。

そういう時代で恵楓園はですね、約1000名の人たちがそこで療養していたわけですね。恵楓園の隣接地には少年航空隊があり、その土地をもらつたもんですから、定員を2000名に増床しよう、南国の病気だからと。まだ鹿児島も沖縄もあったはずですから、昭和26年、1951年ですか？その頃、またハンセン病の強制隔離を始めたんですよ。

その結果起つた事件がF事件だったんです。この事件については、約10年前に『新・あつい壁』という映画にしました。F事件が起つた当時は、ちょうど戦後民主主義が叫ばれている頃でした。

この当時、恵楓園には園内の規則を守らなかつ

た入所者を閉じ込める監禁室があり、そこに閉じ込められている人が脱走することもありました。脱走と言っても、恵楓園の事務員が看守をやっているようないい加減な所です。その裏戸が開いてたこともあって、そこから逃げた人もいたんですね。恵楓園に入った人は、家の人と何も話すこともできずに来た人も多かったです。

Fさんも、奥さんが実家に帰ってしまっていたし、小さい子どもと自分のお母さんだけが家に残っていたから、心配で帰りました。そうしてまたまた帰った時に、近所で殺人事件が起きたんです。そして、Fさんは殺人事件の犯人として逮捕され、不十分な証拠といい加減な裁判で死刑判決を受け、死刑に処されました。

この事件が起きた時、私は中学2年生でした。新聞では、Fさんが恵楓園から脱走し、らい菌をまき散らすということが報道されました。そういうような表現で報道されました。私も、もう中2になると新聞読んでますからね、「怖いな」と思った記憶があります。

その事件があり、それから黒髪校事件という事件が起きました。「黒髪校問題と言え！」なんていって教育委員会の先生には怒られましたけど、いやこれは事件なんですよ。

ハンセン病にかかり、入所しますね。だけど、結婚していたり子どもがいる人は、やっぱり家のことが心配で入所したくないわけですよ。奥さんはどっか住み込みに働きに行って、再婚しちゃう。ほとんどはそうだったんですね。リデルさんの回春病院跡に恵楓園入所者の子どもたちのための保育所（竜田寮）が作られたんです。それで、その保育所の子どもたちは、保母さんと一緒にずっと生活していました。で、保育所の中に黒髪小学校の分教場があったんですね。一度退職された先生がそこで教えていて、笠智衆さんとそっくりらしいんですよね。戦後民主主義教育が叫ばれていた時代で、熊本市の教育委員会は教育の機会均等を掲げるなかで、その子どもたちを黒髪小学校の本校に入れようとしたんです。そしたら、もの凄くPTAが反対したんですよ。でプラカード作つてもう本当に醜い、醜い反対運動があったんですね。

ね。

一応昭和29年ってなってますけど、もう27、28年からずっとくすぶってきてたんです。その時、その児童数は1000名前後だったんですね。戦後の子だくさんでしょ。だからPTAは800ぐらいだったんだろうと言われているんですね。その内、「入れましょう」と賛成したのは10人っていうか10戸っていうんですかね、まあ10人ぐらいの人しか賛成しなかったんです。他はもうみんな反対か、意思表示しなかった。PTAがあんまり強いもんですからね、小学校の先生方も、何にも言えなかった。

この脚本は、実は学生時代に書いたんですね。卒業制作で書いた脚本なんんですけど、それを熊本の教職員組合に手紙を出して、こういうのがありますから、お金はありませんが、ぜひ映画にしたいと伝えました。そしたら、その時もね、事件当時、学校の先生方は子どもたちの力になれなかつたっていうんですね。だから、その子どもたちに対するお詫びとして、あるいは新しい学びとして、この映画に協力しようって事で、300円の制作協力券（前売り券）を売って作り上げたものなんですね。

黒髪校事件の時に、子どもたちを入れることに賛成した人々は、ほとんど大学教授とか、そういう人たちが多かったんですね。映画制作の実行委員会委員長も、ある大学教授がなってくださいました。その先生は、熊本で旧制中学から広島高等師範、文理大に行かれた先生で、徳島大学の教授をやってしていました。そしたら、新しく大学を創設するから（現在の熊本学園大学）、そこの教授になるために帰って来いって言われて、熊本に帰ったんですね。間もなく黒髪校事件が起き、子どもたちの入学に賛成されました。他の賛成した人々も、ほとんどはよそから来た人で、地続きの人は少なかったです。九州女学院（現九州ルーテル学院）の江藤先生という方も賛成されたんですね。

それで、黒髪小学校のPTAを含めて、地域の住民がハンセン病についてどのように考えていたかということですが、恵楓園のお医者さんたちが

ですよ、「親が病気でも子どもたちは病気ではありません」、「もう100%うつりません」、「長い間、それこそ乳幼児期に患者さんと接した人でないと発病しません」というように、子どもたちの入学に反対する人たちを説得しようとしたんです。でも聞く耳をもたなかつた。その時はもうハンセン病は治るってことも言われていたんですね。でも聞く耳をもたなかつたんですね。

それで、じゃあ私はどうだったかというと、私は高校2年でした。母は中学校の教員でしたけど、私は母に向かって「おかしいね」、「恵楓園の先生たちが大丈夫だって、入れてやりやいいじゃないかね」って言いました。そしたら母はですね、教師ですよ、頭の中では理解できるって言うんですよ。しかし皮膚感覚っていうのでしょうか、本能、感情的には嫌だって言うんです。

この事件では、科学が感情に負けたんですね。頭では竜田寮の子どもたちが病気ではないことも、その子どもたちから自分の子どもに病気がうつらないことも理解してるんですよ。ほとんどは、そういう親御さんたちだったと思います。理解していくとも、嫌だっていうことね。ここがやっぱり、差別の一番難しいところじゃないでしょうか。私はその時、そう感じました。そういう、科学では割り切れない感情の根深さが、児童総数1000名前後で、そのうち賛成した人はたった10人だったという結果に表れたのだと思います。

それで、その時どういう解決をしたかっていうと、今の熊本学園大学を作られた高橋守雄先生が、うちに引き取ろうっていうことになったんですね。で、3人の1年生の子どもたち、女の子2人と男の子1人だったと思います。1年生だけ黒髪小学校に入れようってことになりました。妥協ですね。それで入ったそうですよ。でも3人が入ったクラスは、子どもたちの入学に賛成した10人の人と、先生の子どもさんだけだった。その後、その3人の子どもは、いつの間にかいなくなってしまったようです。その高橋先生の家に引き取られ、それで一応、黒髪小学校には通ったけど、いつの間にかいなくなった。まあ、ごまかしごまかしながらですね。

事件の時、黒髪小学校から子どもの足でも歩いて10分ぐらいのところに、S小学校っていうのがあるんですね。そこのPTAの人たちが、「あれほど恵楓園の先生たちが大丈夫だって言ってるんだから入れてやればどうかね」と、黒髪のPTAを責めたんですよ。「子どもたちがかわいそうだよ」って。そしたら反論が来たんですね、黒髪の方から。「俺たちは嫌だ、私たちは嫌だ」って。そして黒髪小学校PTAは、反対に「あんたたちがそう言うなら、子どもの足で10分ぐらいだから、S小にあの子たちを入れてくれ」って言ったそうです。そしたら、S小学校のPTAは「それは困る」と言って断ったそうです。

この話を聞いた時、差別というのは、やはり自分の身の上に降りかかった時に正しく理解し、正しい行動を取らなければいけないなと思いました。だけと、なかなか難しくてそれはできませんね。どうしても、やっぱり感情は科学だけでは割りきれない。感情というのは、非常に難しいなと思いました。

そしてこの事件から15、16年たった頃、借り物の知識や言葉ではなく、自分の頭で理解することが大事だと思って、事件後にその子どもたちがどうなったのかを、自分で調べたんですよ。それまでは、ハンセン病問題や部落問題などの差別について、借りものの知識しかありませんでした。学生時代に事件を題材とした書いた脚本も、その当時は私もまだ若かったので、自分の言葉・自分の考えが足りませんでした。脚本も書き直さなきゃいけないと考えました。

1人の子は、両親が療養所にいらっしゃったんです。そのご夫妻の子どもさんですが、私が訪ねる半年前に自死しておりました。

1人の女の子は、大阪で会ったんです。会ってくれました。すごい派手な服を着ていました。キャバレーに勤めている。まあ、ホステスやってる。私は、「何のため勤めてるの、こんな夜遅くまで酒飲んで」って聞いたんです。そしたら彼女は、ケラケラ笑いながら、「人間に復讐してやるために」って言うんですよね。私はお金のためって返ってくると思ってたんです。私があんまり馬鹿げた

質問をするもんですからね、このまあ幼いっていうか、稚拙な男が何を言っているかという感じもあったと思うんですけど。そしたら彼女からは、「復讐してやるため」っていう言葉が返ってきて、私はかなりショックを受けました。

1人の男の人は、船員になっておられました。話を聞いた時は、ちょうど静岡の清水港に着いていた。色んな話を聞いて、「船の上ばかりじゃ寂しいんだろう」って聞いたら、「いやあ、人は少ないし一番いいですよ。俺の過去もばれませんしね。」って話してくれました。ここが一番いい。だから、年に2か月は休みがあるそうですけど、「もう船から降りる気ありません」とおっしゃってた。

16年たって、その人たちは22歳でしょう。22歳だったら、お父さんがいてお母さんがいて、「ただいま、いってきます」みたいなね、そういう当たり前の生活っていうのがあるじゃないですか、我々には。16年たっても、そういう当たり前の生活すら、1人も手に入れることが出来なかつたということですね。

看護師になっていた人もいました。会った時、この方は高等看護学院を卒業した年でしたね。病院で看護師として働いていました。この人は非常に努力をした人だなと思いましたね。

しかし、我々がありがたいとも思っていない普通の生活すら、16年たってもみんなが送ってなかつたということに、私は非常にショックを受けました。

もう1つ、PTAの人たちが氣の毒だなと思う話もあるんですね。あの、黒髪小学校のPTAの人たちです。あなたたちはそんなに心配ならば、恵楓園を見学に来いって言われたんですね。それで、PTAの人たちは何人かで、恵楓園に見学に行かれたんでしょう。そしたら、白い予防着を着せられ、長靴を履かされ、帽子を被せられたんですね。そして正門ではなく、裏門から入りますからね。入るところに四角いこのぐらいのね、クレゾールっていうんですか、それが入った容器が置いてあるんです。どこの療養所も一緒でしたね。そこにペチャベチャって、足を消毒して中に入る。

中に入ったら、お医者さんと看護師さんたちが深々と帽子を被って、大きいマスクはめて長靴を履いている。ペストが中国で流行った時、消毒した写真があるじゃないですか。PTAの人たちは、そういう格好を見たんですよ。それでね、「うつらない、うつらない」なんて言われたって、これはね、理屈よりそっちの見た目の方が勝ちますよね、どうしても。それが逆効果になった部分もあるんですよね。そういう消毒とか予防着は、らい予防法によってさせられていたわけです。

恵楓園の小学校は分校でしょ。その職員室は外にあるんです。そこでは先生たちが予防着を着て、中に行つて教えるんですよね。岡山の長島愛生園にできた邑久高校新良田教室では、紙幣を持っていくと、先生たちが洗面器のクレゾールで100円札をペチャペチャして窓に貼つてたっていうような時代でした。だけどその後は、そのうちに職員の人も慣れてしまって、逆に職員の方がもう全然気にしないようになっていきます。

先ほどハンセン病資料館の館長の先生と話したんですが、こうやって、今日は全生園の文化祭に、園外から多くの人がやってくる。だからもう差別はなくなつたと思うけど、差別の問題になると全然だめだって、館長から言われました。それは、部落差別でも同じじゃないかなと思います。私がここ多磨全生園を初めて訪ねた時は、まだ私も24、25歳の頃でした。恵楓園に行ったのはもっと早いですが。

ハンセン病資料館に勤めながら全生園の入所者自治会長をやっていた佐川修さんとか、あるいは東大出身の光岡良二さんとか、私は色んな方から色々なことを学ばせて頂きました。だけど、そういう方たちは、みんな鬼籍に入られてしましました。私はまだあの人たちより若いから、もっと映画を作つてきたいなと思いますけど、ハンセン病を主題とした映画はなかなか作れません。

どうもすいません、もう時間になりました。映画をどうぞ観てみてください。どうも今日はありがとうございました。